

北海道帯広市方言のアクセント

竹本 拓也

要旨

本論文は筆者が2009年9月に北海道帯広市で行ったアクセント調査(名詞・動詞・形容詞・数詞および助数詞)と自身の内省に基づいて、北海道帯広市方言のアクセントを記述したものである。2・3拍名詞では類別語彙のアクセント体系を提出し、個々の語のアクセントの推移についても先行研究と対照した。

調査者の多数形をとると2拍Ⅱ類で尾高型となり、Ⅳ・Ⅴ類が母音の広狭を問わず頭高型となったため、共通語と相違はない。しかし、家系の出身地や世代・年齢といった要因が影響してインフォーマントによってさまざまな類の統合が見られた。

3拍名詞は2拍名詞よりも個人差が大きい。共通語化の影響でⅤ類中高型が衰退し頭高型がそれにとって代わったこと、Ⅳ類では尾高型から中高型への移行が見られることが分かった。その他Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ類では平板型と尾高型の区別があいまいになっている傾向が認められた。

動詞と形容詞は名詞ほど年齢によるアクセントの違いは見られないが、拍数が少ないほどアクセントのゆれが大きいこと、平板式と起伏式の区別なく同じアクセントで活用を試みる傾向が著しいことなどが分かった。

数詞・助数詞付きのアクセントも名詞ほど年齢差は見られないが、「～分(フン)」ではその差が現れた。全般的に共通語アクセント規則よりも単純化されており、最も日常的に使う数字では共通語とのずれが目立つ。